
ほっとけ！

一言 真

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほつとけ！

【Nコード】

N3901J

【作者名】

一言 真

【あらすじ】

ひょんとしたことで、学年一の美少女と恋人同士と間違われてしまった村上静次。静次は、彼女とともに、広まる噂を何とかして打ち消そうと、一芝居を打つことにする。しかし、それは失敗に終わる――？

ブローグ

俺は制服に着替えながら、そつと携帯電話のサブウィンドウを覗き込む。サブウィンドウがちかちかと点滅し、そこに葉崎という字が映し出されている。

おいおい……。もうきたのかよ。

ワイシャツの袖に手を通しながら、俺は片手で携帯電話を開く。そして、メールを開くと、そこには。

——こらあつ。早く来んかいっ！ ウスノロっ！

俺はそこにいないはずの彼女の顔を目の前に見て、ひいっと携帯電話を落とす。

震える手で再び拾い上げながら、自分で、これは重症だな、と心中でつぶやく。

俺は再び気を取り直して鏡を見ながら、学ランの襟を正し、「よし」と青白い顔で弱弱い声を出す。そして、胸の前で手を合わせて、「どうか今日一日無事でいられますように」と自分の顔を拝み、鞆を取って自分の部屋を出た。

階段を下りると、玄関の段に腰を下ろして携帯電話を打っていた岩瀬が振り向いて、

「よっ、仕度終わったか。行くぞ。……良子ちゃん、待たしてるぞ」

岩瀬は、俺の心中に漂う、この途方もない恐怖に全く気付く様子もなく、気楽な調子で鼻歌を歌いながら立ち上がる。

「わかってる。早く行こう」

俺は震える唇でそうつぶやいて、岩瀬と連れ立って外へ出た。

急いで鍵を施錠して、携帯電話を打ちながらのろのろ歩く岩瀬の背中を押しながら待ち合わせの場所へと向かう。

公園の入り口の前で、彼女が待っていた。朝日の眩しい光に、長い黒髪を照り輝かせ、彼女はこちらをまっすぐに見て、笑っていた。

とてもきれいに。けれど、その裏に隠されているのは、悪意、だ。
ぜったい悪意だっ！

「おはようございます、岩瀬さん。そして、静次さん」

「そして」のところが強調されて、彼女の視線が岩瀬の前を通り過ぎてから、こちらに来る。

「あつあつだねえ、二人とも。やっぱりお前ら、下の名前で呼び合う仲間なんだな」

岩瀬が携帯電話から顔をあげて、ヒューヒューと二度口笛を吹く。
「おい！ 岩瀬！」

そう声で静止した後、彼女の顔をちらりとうかがうと、彼女は――
笑っていた。ただ、その笑顔は、硬直していた。

ああ、ものすごく怒ってるね、これは。

俺は震えながらも、決死の覚悟で口を開き、なんとかフォローの言葉を口にしようとする。

「んなことあるわけないだろ。どうして俺が、こんなアマト……」

いけない。緊張のあまり、つい本音が出た。

ゆっくりと彼女の首が、こちらを向く。

ああ、終わったね、これは。

それは、始業式当日のことだった。俺は今一つ新しいクラスの雰囲気溶け込めず、廊下をうろろろしていた。

自分で言うのもなんだが、俺は人づきあいが得意な方じゃない。教室で皆がわいわいと自己紹介をし合っている中、自分だけ早々にリタイアして、蚊帳の外へ。

そんな訳で少し落ち込んでいて、俯き加減になっていた。斜め三十度ほど。

その傾斜角度のおかげか、俺はよく前を見ておらず、廊下の角から突然飛び出してきた人影に気づかなかった。

「きゃっ」

それは、とても高らかな声だった。それが、自分のすぐ頭上で聞こえてきて、俺は眼前の女子生徒の方へつんのめりながら、自分の心臓がどくんと一鳴りするのを感じていた。

ドサッ。

俺は思いつきりずっこけて、頭を廊下の床へたたかに打ち、「いたたた……」と頭をさすりながら立ち上がる。

そつと半目を開けながら下を見下ろすと、そこには床に横たわる女子生徒の姿がある。

長い黒髪が柔らかく床の上に散開し、それにつつまれるようにして長細く華奢な体躯が横たわっている。

横を向いている彼女の顔が、ふと前を向き、その目が俺を映した。茶色つばい、透き通るようにきれいな瞳で、彼女はじっと俺の顔を見た。

俺は動けなかった。その顔は、人形のそれのように整っていて、その肌は文字通り雪のように白い。ありえないほどの綺麗な女の子。「いたたたた……。たく、何すんだ、この」

ぼつりと、その形の良い唇が動く。俺はぼかんとだらしなく口を

開けたまま彼女の顔を見つめる。

「何すんだこのって言っただよ、このクス」

……今のは空耳だったのだろうか。まあ、今の俺にはそんなことはどうでもいいことで、俺は開けた口からよだれが垂れてきたのにも気に留めず、彼女の顔を眺め続ける。

「うわっ、何よ。よだれ垂らすんじゃないわよ、ボケナス」

俺を見上げながら慌てて立ち上がる女子生徒。

俺はそこでやっと我に返って口のよだれを拭いながら、「大丈夫？」とぼそりとつぶやく。

「ええ。大丈夫です」

俺が言葉を言い切る前に彼女はそう切り返し、落ちた自分の持ち物を拾い上げようとする。

その時――。

「あ――」

彼女の体がぐらりと傾いた。俺は慌てて彼女の肩に手を伸ばし、その細い体を胸に受け止める。

大丈夫ですか――。

そうつぶやこうとした唇は震えて、うまく喉から声が出ない。

胸の中に彼女の柔らかい肌の感触がある――。

その時、俺は、床に落ちている一つのCDケースに目が留まった。そのジャケットを見た途端、今腕の中にいる彼女のことなど、すべて吹っ飛んだ。

「ゼ、ゼノッチーズの、インディーズの時の1stアルバム――！」

俺は目ん玉が飛び出るくらいに目を見開いて、少年が空を仰いでいるそのジャケットを見る。

「これ、すげえプレミアついてんだよ。どうして、どうして持ってるのお!?」

思わず腕に力が入る。

「何、何なのよ、痛いっ、痛いっ!」

ゼノッチーズのCDに出会えた喜びのあまり、力の限り腕の中の

ものを抱きしめる。

その時、廊下の奥から声がした。

「あれ？ あいつらあそこで何やってるんだよ。ていうか、あれ、葉崎じゃねえ？」

「ほんとだ。ちょっと待て、何抱きあってるんだよ、あいつらっ！」
なんだか廊下にどんどん人だかりができて、視線がこちらに集まっているようだけど、まあ今はそんなことはどうでもいい。……ああ、ああ。

「ちよつと、早く手を離しなさい。あらぬ誤解を受けるじゃないの！」

肌に指が食い込むくらい力を込めて、無理やり俺の腕を体から引きはがそうとする女子生徒。

俺は腕に走る痛みも意に介さず、そのジャケットをいとおしそうに見つめる。そして、興奮のあまり、たまらずに口を開き、

「大好きだ！ 大好きだあ〜」

そう叫び、一層腕の中の彼女を抱きしめた。

「うぐあつ。やめつ、やめつ」

苦しさの余り、俺の背中に腕を回す女子生徒。

「いいかげんに……」

しろっ！ と、彼女の膝が思い切り俺の股間の中に入る。

「い——」

歯を食いしばって天を仰いだところで、ようやく我に返る。そして、見開かれた俺の目に、たくさん生徒がこちらを見てささやきあっている光景が映る。俺は今の状況を理解する。

股間から全身にかけて、電流が走る中、俺はおそらく青白いであろう顔を、腕の中の彼女へ向ける。

彼女はようやく俺の抱擁から解放されて、息を切らせながらこちらを睨んでいる。

俺は彼女の視線に体を硬直させながらも、ゆっくりと腕を彼女から放す。彼女はそれでもじっと俺を睨み上げていて、ふと口を開い

てささやいた。

「……こうなつたら仕方無いわ。私にあわせて頂戴」

あわせるって、何を？ そうつぶやこうとした瞬間、

「静次さん、また後でね」

彼女は笑顔でそう言つて、一歩二歩、後ろに下がると、くるりと体の向きを変えて走り出した。

「おい！」

俺は遠ざかっていく彼女の背中に手を伸ばす。

彼女が、生徒たちの視線を一身に受けながら、一度こちらに振り返り、

じろり。と、一際鋭い視線をこちらに向けて、そして、廊下の奥へと消えていった。

女子生徒を追っていた生徒たちの視線が、彼女が消えると同時に、俺に集まる。

「誰だよ。あいつ。葉崎の彼氏か」

「葉崎に彼氏いたのかよ。シヨックだな……」

色々な声が飛び交い、俺はそれにたじろきながらも、床に落ちているゼノツチーズのCDに気付き、それを拾い上げる。

「落し物……」

そうつぶやきながら、CDケースから視線を離し、俺は彼女が消えていった方向を見つめた。

俺は、自分の席を新しいクラスメイトに取り囲まれて、少々困惑していた。

葉崎さんとは、どういう関係なの？

人前で抱き合うなんて、しかも相手は葉崎さん。やるねえ、あなた。

——これが、女子陣の声。

お前、どんな手使って葉崎を落したんだよ。頼む、教えてくれていうか、師匠って呼ばせてくれっ！

もうやったのか……？ ポッ（赤面）

——これが、男子。

質問攻めされることに全然慣れていない俺は（何しろ今までまるで目立たない生活をしてきたもんだから）周囲の勢いに圧されて、口をあつぶあつぶさせながらあえいでいた。

そんなところに手を差し伸べてくれたのが、岩瀬だった。

「おいおい、お前ら。そこまでにしておけよ」

人だかりの横で、椅子に座りながら携帯電話を打っていた岩瀬が、ちらりと視線をよこす。

「我が友村上静次が困ってるじゃあないか。ほら、どけどけ」

岩瀬は群がるクラスメイトを払いのけつつ椅子に座っている俺に近づく、腕をがしつと掴み、立ち上がらせて教室の隅の方へ半ば引きずるようにして連れていく。

「おい……お前」

俺は岩瀬の顔を見やり、

「同じクラスだったのか」

「……ああ。俺も今さっき気付いた」

そう言って岩瀬は、端正なその顔をにやりと笑わせ、壁に背中を寄り掛からせた。

「で、お前、葉崎と付き合っているって本当なのか？」

「結局お前もその話かよ。葉崎ってそんなに有名なのか？」

俺は、岩瀬の隣の壁に背を寄り掛からせ、手の中にあるゼノッチーズのCDを見つめてつぶやく。

「有名だよ。お前それを知らないで付き合ってたのか？」

「付き合っていないっつの」

「あのスゴイ容姿で有名にならないわけないだろ。お前が葉崎を抱きしめて、大好きだって一喝したって、学年中がもうその話でもちきりだぞ」

そう言って、ちらりと岩瀬は、ひそひそとこちらを見てささやき合っているクラスメイト達を見る。

「あれは、色々と込み入った事情があつてだな……」

そう言って、CDケースを握りしめた時、

「村上君！」

声がして振り向くと、教室の扉近くにクラスメイトの女子が立って、にやにや笑いながら、こちらに手を振って呼んでいる。

その女子の向こうに佇む彼女を見た瞬間、俺はゲツと息をのむ。

彼女は笑っていた。だが、その笑みは硬直していた。

俺はまだ痛む股間を震える指でやさしくなでて、意を決したように体を起こすと、戸口で待つ彼女の元へと歩き出す。

「頑張れ。健闘を祈る」

ぼんと背中を押されて、俺はつんのめりながら、クラスメイトの視線の集中砲火を浴びて彼女に近づく。

ニヤニヤ笑いながらこちらを見つめる女子生徒の横を通り、俺は彼女と向かい合って立ち止った。

「行きましよう」

突然ぱしつと腕を掴まれ、それがものすごい力で、俺は葉を食いしばりながらそれに耐え、一言、「うん」とつぶやいた。

教室の中で、「おお〜」とどよめきが起こる。

俺は腕の骨がみしみし軋んでいることに気を取られて、周囲の反

応に構わずに、どんどん引つ張られるようにして廊下を歩いていく。
人のいない、廊下の曲がり角のところまで来ると、彼女は足を止め、ようやく俺の腕を離れた。

「あゝ痛つてえ。何なんだよ」

俺が腕をさすりながらそうつぶやくと、

「なんなんだよ、じゃないわよっ！」

突然肩をがしつと掴まれ、背中を壁に叩きつけられる。

「あんたのせいで、大変なことになったじゃないの」

「それは謝るよ。悪かった」

「悪かったですまされると思ってるの？」

みしみしと肩が軋みだす。

「やめつやめつ。肩がっ！」

「こうなったらあんたと一芝居打つしかないわ！」

「一芝居つて……」

「そうよ。皆にはつきりと私たちが何でもないってことを示すのよ」

「どうやって？」

「これを明日までに覚えてきて」

突然肩に置かれた手の力が緩められて、俺は一息つきながらそのメモ用紙を受け取る。

「明日廊下で、そこに書かれてるやり取りを、わざと皆の前で演じ通すの。それで間違いなく誤解は解けるわ」

「はあ……」

俺はメモ用紙を制服のポケットにしまいながら、肩をひそめる。

「良い？ 明日またあんたの教室に行くからね。ちゃんと覚えてきなさいよ、わかった？」

「はあ……」

俺が訝しげに見ると、彼女は一層鋭く目を細め、

「わかったって聞いてるでしょ！」

バンッ！ と思い切り俺の顔の横の壁を叩いた。

俺はひいっと身をすくめて、壁に置かれた彼女の手から一歩退く。

俺の驚きようを見て彼女は薄く笑うと、

「じゃあ、明日ね。村上静次君」

そう片手を上げて、廊下の奥へと消えていった。

俺は壁に体を張りつかせたまま、啞然と彼女の去って行った方向を見つめていたが、ふと左手の中にあるCDケースの存在に気付いた。

「まず。返しそびれた」

その日の夜。俺は風呂上がりの恰好で、自室でベッドにあおむけに横になっていた。

例のメモ用紙を掲げて持ち、眺めながら、

「なんだこれ」

そうつぶやいた。

あんた「おい、お前俺に逆らう気か」

私「もうやめてください。私、もうあなたの言いなりになるのは嫌なんです」

あんた「何だとこのアマ！ こないだ撮った写真、ばらまいても良いのか？」

私「やめて！ それだけは！」

あんた「だったら俺の言う事聞け！」

このやり取りを聞いていた生徒Aがおびえる私を見るのに耐えかねて、人だかりの前に出る。

生徒A「やめろ！ 葉崎さんをいじめな！」

あんた「何だデメエ！ やる気か！」

「おいおい……葉崎の奴……」

俺はメモ用紙をくしゃくしゃに丸めると、ぽいつとそれをゴミ箱へ投げ捨てる。

「できるかよ、こんなの」

溜息をついたところで、ふと、机の上に置いてあったゼノッチー

ズのCDに目がとまった。

俺はベッドから起き上がると、ケースからCDを取り、それをコンポに入れる。

再びベッドの上に横たわると同時に、軽快なめロディーが流れ出す。

俺は「おお〜」と叫んで、目を細める。

「いいね〜。いいよ〜」

そう叫んでいると、突然、携帯電話が鳴りだした。

俺は至福の笑みのまま携帯電話を取り、「はい」と答える。

「よう、村上！ 朗報だぞ！ 朗報だー！」

そのほかでかい声を耳に受けて、俺は携帯電話を耳から突き放しながら、「なんだよ、朗報って」とつぶやく。

「喜べ。明日からお前、葉崎ちゃ……良子ちゃんと一緒に登校できるんだぞ」

「は？」

俺は緩ませていた口をへの字に曲げて、つぶやく。

「だから、良子ちゃんと一緒に登校すんだよ、お前は！ 今日、偶然帰り道で良子ちゃんとあつてな。お前、こういうことなかなか言い出せなくてやきもきしてるんじゃないかと思ってさ、俺が気を利かせて良子ちゃんに頼んでおいたんだよ」

「なんだよそれ！ 何余計なことしてくれてるんだよ！」

「ついでにお前のメルアドも教えておいたからな。彼氏なのに、メルアドも教えてないなんて、どんだけ恥ずかしがり屋なんだよ、お前は」

そうケラケラと笑う声が電話越しに聞こえる。

「じゃ、俺、バイトの途中だから、もう切るわ」

「途中なのかよ！」

「バーイ」という声と共に、プツリと一方的に電話を切られる。

俺は携帯電話をベッドに投げ出しながら、「なんだよそれ」と額に手を置く。その時、再び携帯電話からメールの着信音が鳴った。

俺は「今度はなんだよ」と携帯電話を取って開くと、そこには。

——明日までに必ず覚えときなさいよ。もし覚えてこなかったら、今度は蹴るだけじゃなくて、すりつぶすから」

思わず俺は股間に手を置きながら、「すりつぶすってなんだよ」と青ざめた顔で、つぶやいた。

——明日の七時半。岩瀬君の言っていた公園で待ってるわ。遅れるなよ、ボケ。

俺は股間に置いた手にもう片手を重ね置いて、「ひいひい……」と情けない声を漏らした。

俺は隣に岩瀬、そしてその横に葉崎を引き連れて、通学路を歩いていた。

三人の間には沈黙が降り、俺は先ほどしてしまった失言のことで、びくびく挙動不審に、手と足を同時に前に出して歩いていった。もちろん股間に手を添えて。

その時葉崎が、岩瀬の顔越しに、ちらりとこちらを見た。

俺はびくつと体を震わせ、股間を守ろうと両手を重ねる。

「ちよつといいかしら」

そう言つて、葉崎は岩瀬と俺の間に体をすべり込ませて、俺の隣に並んだ。

「ああ、悪い悪い、気を遣わなくて」

岩瀬は携帯電話を打ちながらそつと体を横へずらし、葉崎にスベースを開け渡した。

俺は首をゆつくりと横へ振り向けて、葉崎を見る。

葉崎は俺を一睨みした後、

「ちゃんと覚えてきたわよね？」

とささやいてきた。

「あ、ああ。覚えてきたとも」

俺は出来得るかぎりの満面の笑みでそうつなずいた。

「そう」

彼女は険しい顔のままそうつなずき、

「昨日はまいったわ、こいつに付きまとわれて。あんたと一緒に登校するのを引き受けないと、こいつ、下がってくれそうになかったから、面倒くさいから引き受けてやったのよ」

このウスノ口。と、語尾にちゃんと暴言を添えて、彼女は言った。俺はそれきり黙りこくり、相変わらず機械的な動作で歩いていると、正門に着き、そのまま玄関に入った。

岩瀬と並んで上履きに履き替えた後、廊下で葉崎と別れる際、彼女はもう一度こちらに詰め寄って険しい顔でささやき、

「決行は昼休み。いいわね。あんたのクラスに行くから」

そう言つと、彼女はそのままと隣のクラスへと消えていった。

それと同時に、ずつと携帯電話を打っていた岩瀬がようやく顔を上げて、ぽんと背中を叩いてきた。

「よっ！ どうだ、感触は」

「最悪」

「そうか？ 俺には最高に良い雰囲気に見えたけど」

「あれをどう見たらそういう風に見えるんだ」

「そうか？ 初めての彼女と一緒に登校。歩けば、緊張して手と足が同時に前へ出る。話そうとすれば、何を言ったらいいのかわからずに、そのまま学校に着いてしまふ。うん、よくあるパターンだ」

「そういうところだけはよく見てるのな」

俺は呆れながら、頭の隅で、ホント、昼休みどうしようと嘆いていた。

断れば、またあれをやられるかも。もうこれ以上は、こっちの玉がもたないし。

俺は股間をもじもじさせて歩きながら、はあと大きく嘆息した。

午前中の授業終了のチャイムが鳴った。ガタガタと生徒たちが席を立つ音が教室に響き渡るが、俺はそれでも机に突っ伏したまま、安らかな寝息を立てていた。

しかし、誰かに肩を叩かれて、安眠は妨害されることになった。

「何？」

目をこすりながら、脇へ振り返ると、

「彼女が呼んでいるよ」

ニヤニヤ笑いを浮かべながら、女子生徒が教室の扉を指差す。

俺は葉崎が戸口に直立しているのを見て、瞬時に寝惚け眼を見開いて、がたつと椅子を揺らせて立ち上がる。

俺が彼女の元へ行くと、ヒューヒューとはやし立てる声が教室内に聞こえた。その声に、葉崎は眉間をぴくぴくとひきつらせながら俺が近づいてくるのを待ち、

「さあ、決行よ」

そう言つて、俺の腕をつかんだ。

引きずられるようにして廊下に出て（俺よくひきずられるなあ）、その中間点で立ち止る。

振りむいた彼女は涙ぐんでいた。

俺は思わずぎよつとしてたじろぎ、

「ど……どうした？」

とぱくぱく口を開閉させる。すると、彼女は涙ぐみながら、むつとした顔をして、

「ほら、合わせて！」

とささやく。

俺はやつと彼女が演技していることに気付くと、呆れたようにはあと息を吐いた。

「お前なあ。あんなの、できるわけないだろ」

そう言つと、葉崎の顔が真っ赤っ赤になった。

「できるわけないだろ、じゃないでしょ！ やりなさいよ！」

がしつと肩を掴まれる。俺はその手を振り払い、

「周囲の目なんてどうでもいいだろ。何でもない関係なら、何でもない関係らしく、堂々としていればいいんだよ。こうして会つてから、余計目立つんだろ」

そう言つと、葉崎の顔がますます赤くなり、

「あんたは何言われたってなんでもないかもしれないけどね、私は全校生徒の間で超有名な美少女なんだから、一度噂が立つと、それが長く続くのよ。あんたとは、違ってね！」

つかみがかんばかりのすごい形相で睨み返してくる葉崎。

その時、葉崎の顔が突然、あつと息を呑むように変わった。

彼女の視線の先を追って、振り返ると、そこには男子生徒が一人、

こちらを見ながら立っていた。

長髪で、切れ長の眼をした美少年だった。彼は、俺と葉崎の顔を一瞥すると、無関心なその視線を俺たちからすっと離して、廊下の奥へと消えていった。

「あ……」

そんなつぶやきが聞こえて、俺はそつと葉崎の方へ振り返る。

彼女の目に薄く張っていた涙は、またたく間に膨らんであふれ出し、彼女の頬を伝いだした。

「あわわわ。お前何泣いてんの」

俺たちを見てくすくす笑っていた周囲の声が、瞬時にひそひそといぶかるような声に変わる。

「うわ。彼氏が泣かしたよ」

「葉崎さんを泣かすなんて、許せん！」

「葉崎さん、かわいそ〜」

周囲の視線がちくちくと体に突き刺さり、俺はたじろぎながら、

「おい……ちよつとお前」

葉崎の肩に手を置こうとする。その手を葉崎は振り払い、くるりとこちらに背中を向けると、そのまま行ってしまった。廊下に一人ぼつんと残された俺は、周囲の厳しい目にさらされてることになり、早々に教室に帰った。

「お前、どういことだよ！」

携帯電話を耳にあてた途端、聞こえてきた第一声は、やっぱりそのセリフだった。

「良子ちゃんを泣かせたって本当かよ」

「ああ、ホントと言えばホントだけど……」

「あのなあ、お前に振り向く女子はこの先良子ちゃんだけしかないかもしれないんだぞ。これが最初で最後かもしれないんだぞ。わかってんのか、お前」

「かなりキツイ事言っな、お前」

俺はグサグサツと言葉が刺さった自分の胸をなで下ろす。

「男はな、友人に対して厳しくならなきゃならん時もあるのだ。これは、忠告だぞ、村上。今度良子ちゃんを泣かせることがあったら、それがお前の人生の最後だと思え」

プツンとまたしても一方的に電話を切られ、俺ははあ、と息をつきながら、携帯電話をベッドに投げ出す。

コンポの再生ボタンを押して、ごろんとベッドに横になりながら、なんでアイツ、いきなり泣き出したんだろうと心中でつぶやく。

ゼノッチーズの曲が部屋に響き出す。

……まあ、理由は一つしかないか。

俺の頭に、あの時の切れ長の目をした男子生徒の顔が浮かぶ。

俺は再び溜息をつき、どうしてこんなことで俺がやきもきしないといけないんだよと心中で毒づきつつ、もう一度ベッドの上の携帯電話を手にとった。

——翌朝。

話がある。明日の七時半にまた公園で待ってる。できたら来てくれ。

俺は昨晚、そう葉崎にメールを送った。

岩瀬は俺に気を使ったのか、いつもは朝になると一緒に登校するために俺の家を訪れるのに、今日は遠慮しとくとの、メールを送ってきた。

一人で公園に向かうと、昨日のように彼女が入り口で立って待っていた。

昨日のあの泣き顔とは打って変わって、元のように、つんとした愛想のない顔つきでこちらをじっと見ている。

「よっ」

俺は愛想笑いを浮かべてさっと手を上げる。葉崎はじっとこちらを見つめているだけで、無反応。

葉崎は、俺が横に並んで歩き出したところで、ようやく口を開き、

「話って何よ」

とぼそりとつぶやいた。

俺は頭をかきながら、

「お前、あいつのこと好きなんだろ？」

とつぶやいた。

俺の言葉に、葉崎は突然立ち止って、きょとんとした表情を浮かべた。

「あいつってどいつよ」

心なしか、彼女の頬が上気しているのがわかる。俺はそれを見て笑いながら、

「ほら、あの切れ長の目をした男子。昨日俺たちが廊下で言い合いをしてた時、通りがかっただろ。好きなんだろ、あいつが」

「す、す、す、好きってどういうことよ。なんで私が波山君のこと……」

手と足を同時に前へ出してぎくしゃくとした動作で歩き出す葉崎。
「へえ。あいつ、波山って言うのか」

俺がにやけながら葉崎を見ると、

「なんで私が、は、波山君のことを好きでいなきゃなんないのよ、ペケポン」

ペケポン、ってなんだそりゃ。

そう心の中でツツコミながら俺は制服のポケットからしわくちやになったそのメモ用紙を取り出して、掲げて見せ、

「覚えてきてやったよ。やればいいんだろ。決行は昼休みだ」

再びきよとした顔を浮かべて、葉崎は立ち止る。

俺はそんな彼女を置いてそのまま歩いて行くが、彼女はそっと早足で俺に追いつき、

「ありがとう」

ぽつりと、聞こえるか聞こえないかわからないような声でつぶやいた。

昼休み。俺と葉崎は廊下で、向き合っていた。心臓の鼓動が高まる中、俺は「いくぞ」と一言つぶやく。

葉崎は一つうなずき、大きな声でしゃべり始めた。

しばらく台本通りに言い合っていると、俺たちが喧嘩を始めたと勘違いした生徒によって、廊下に人だかりができてきた。

葉崎の演技もなかなかのものだが、俺は中学時代演劇部に所属していて、その演技は神がかっている。と、自分では思う。

葉崎が大きく手を振って（若干大げさに）口を開き、

「もうやめてください。私、あなたの言いなりになるのは嫌なん……」

「なん」のところで口をもごもごさせてまごついている。その視線の先を見ると、例の切れ長の目の男子、波山君が、人だかりをか

き分けて、前に出てきていた。

「やめないか！」

波山君の一斉が廊下に木霊する。

葉崎は相変わらず目を見開いたまま「なん……」のところでセリフを止めているし、俺は波山君の迫力に負けてたじろぎ、葉崎のフオローができない。

「彼女、君に無理やり交際を迫られて、ひどく困ってる。やめないか」

改めて自分自身の演技の腕に嘆息する。ああ、俺、読書部なんかじゃなくて、演劇部入るべきだった。

「なんとか言わないか」

俺は冷や汗をかきながら口を開き、

「うるさいっ！ これは俺と良子の問題だっ！ お前は口を出すな」

そう言つて手を振り上げようとすると、その手を早くも波山君の腕がぱしつとつかみ、

——ふわりと。

一瞬体が浮かんだ。

俺は反転する視界の中で、ああ体浮いてるなと呑気なことを考える。背中に激痛が走るのは、そんな思考が通り過ぎる一瞬後のことだった。

「っ——」

わあっと周囲で喝采が起こる。俺は波山君に左手を取られて、縮こまりながらも、

「てめえっ！ 何するんだ！」

と殊勝にも暴れ出す。

そんな俺に対して、波山君気にした風もなく、僕の左腕をひねり上げる。

「あたたたた……」

「もうよさないか」

「へっ！ こんなところでめげるような俺様じゃない……」

額に汗を垂らしながら、俺はふつと不敵な笑みを浮かべる。

波山君は——というか、もう君付けで呼ぶことがためられるほどにいらついてきた——波山は、俺と同じような笑みを返してきて、一層俺の左腕を持つ手に力を込める。

「やめて……」

その時、つぶやきが聞こえた。

「もうやめて……」

波山君が無表情で後ろに振り返り、葉崎を見る。

「全て今のは演技だったの。だから村上君は悪くない」

「演技？　どういうことだ」

波山君は、ぽいつとあっけなく俺の腕を解放する。

「私と村上君で打った一芝居だったの。今のは、全部」

その言葉に、波山は俺と葉崎の顔を交互に見比べて、

「すると、君たちは、今のやり取りをわざと皆に見せる為にやっていたと？」

そういうことになるわね、と葉崎は俯きながらつぶやく。

波山は息を一つついて、しゃがませてた腰を上げて立ち上がり、

「何の為にこんなことをするのか全く意味がわからない」

と、冷やかかな言葉と視線をよこしたなり、再び人だかりの間をすり抜けていった。

ざわざわと周囲で困惑するような声が上がる。

俺は左肩を右手でさすりながら立ち上がると、俯いて動かない葉崎の手を取る。

そのまま彼女の腕を引いて、人だかりを腕で払って道を開けつつ、早足で歩く。

誰もいないところまで来ると、俺は彼女の腕を離す。

俯いている葉崎の目元からぱたと雫が落ちる。その時、ぽつりとおつぶやきが聞こえた。

「失敗しちゃった」

俺はじつとその横顔を見つめる。

「失敗しちゃったじゃないの、このウスノロ」

そう言って上げた彼女の顔は濡れてて、けれどその表情は笑っていた。

俺はその笑みに、不敵に笑い返し、

「ああ。失敗だ」

そう言って壁に背を付けた。

「なんでお前、ばらしちゃったんだよ」

すると、葉崎は背中を手を組んで、こてんと俺の隣に寄りかかり、
「あんただけ悪者扱いするの、どうも気が引けてね・良心の呵責つてやつ？」

「どうするんだ？」

「どうするもこうするも、こうなったら仕方がないわ。小細工なしで、絶対に波山君をふりむかせてみせるわ」

そう言って、葉崎は腕裾で涙をぬぐい、

「あんたにも色々手伝ってもらって悪かったわね。……まだ肩痛む？」

「いや、もう大丈夫だ」

肩に手を置いて、左腕をくるくると回しながら、俺はそう言う。
本当はまだ痛かったけれど、なんとなくそのことを言うのは気が引けた。

「あ、そういえば、CDまだ返してなかったな」

「ああ、ゼノツチーズの？ あのアльバム、三曲目が特に良いのよね」

「そうそう。シスターだったけ？ あれが良いんだよな」

「わかるじゃない」

俺は壁に寄りかかったまま、ゼノツチーズについて話し合った。
知らない間にお互いの顔に笑みが戻り、俺たちは、音楽の話で盛り上がった。俺たちが友達になった、その瞬間だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3901j/>

ほっとけ！

2011年10月5日02時41分発行